

# 「白い風物語り」その後

石川県立ろう学校 木 田 辰 夫

「忘れられた子」——精神薄弱児については、既に幾冊もの書物に書かれ、映画も作られました。そのためある程度世の人の関心も高まって来ているようです。

ところが、いまだに「忘れられた子」であるのは——「ろう児」ではないでしょうか。

もう何年も前、盲学校とははっきり切り離されてしまっている「ろう学校」なのに、「もうあ学校」といわなければいまだに通じないことが多いようです。「ろう」であるがゆえに「あ」ならざるを得ない、といったのは一昔以前で、教育によって話すようにすることが可能であるというので、その校名から「あ」を追放している今でも、「ろうあ学校」と社会ではいっています。

全く残念なことです。

「ツンボ」オシ「テーマネ」の学校だ、と世の中ではやっぱり思っているようです。

私がろう学校の先生になった、と聞いて、私に「いつ手まねで教える技術を覚えた。」とまじめにたずねる友人が少くありませんでした。

普通教育畑から入りこんだ私にとっては、何よりも、この特殊児童に、いかにして、人間であるという喜びと尊さを知らせ、よりよい「人間」に育てあげていくべきかということが一番大きな問題であって、そのために悶え苦しみつづけている、ということなど、誰も考えおよんではくれませんでした。

ろう学校へ来て三年目の私ですから、「ろう教育」について世に問う、ということは先輩の方にゆずりたいと思います。

ただ、こういう点とはいえると思います。

特殊の世界に閉じこもっていますと、特殊が特殊でなくなってしまう、ということです。私も、こうした「特殊化」を互に警戒しあっています。なぜなら、自らが「特殊性格」になってしまつては、とうていこの子らを「人間」として育てあげようということは難しい、と思いますので、いまだに一つ一つの事象に目を見はり、耳をそば立ててめずらしいがっています。そして、そこをろう児の特殊性を知り、次の教育への示唆を得て行くのです。

私は、それでいいのだ、と私なりに、少くとも只今は考えています。

この子らのために、我が一生を犠牲にしよう、と、まるで修道院へでも身を沈めるような考え方は、気高いかもしれませんが、はたしてこの子らの「人間完成」のために幸いなことでしょうか。

教師である前に「人間」であれ、ということばを聞いています。

特殊教育にあつても、あるいは特殊教育だからこそよけいに、「人間臭ぶんぶん(?)たる」教師でなければならぬのではないのでしょうか。いや、でなければならぬなどという資格がない、と、この道の専門家から叱られるかもしれません。ただ、私はそうありたい、それでよいのだ、と考えて来しました。

ろう教育に対する社会の関心の薄さもさることながら、ろう児についての世人の理解もいまだしの感がないでもないようです。

私は、三年の間一しょに生活して来た「ろう児」の姿を、私のノートから少し抜いて、まとめてみました。

いわば、スケッチです。

これをもって、ろう児とはいかなるものか「理解」していただけたようとは思いませんが、何とはなしに、ろう児に「親しみ」を感じていただくよすがともなれば、幸いこれに過ぎるものはありません。

x

——こうした書き出しで、私が「白い風物語」をつづつたのは、そう、もう二年も前のことです。

世間から、不具者としてうとんじられないまでも、かわいいような子らとしてあわれみをかけられるのが精一ぱいの「ろう児」を、「ろう児もやっぱり、人の子です」と紹介したい、せずにはおかれぬという気持にかられて、けれども経費の關係から、ひまひまに自分でガリ版に起こし、自分で刷る、というわけで、でき上りはまことに読みづらいものとなつたが「おひとりおひとりにお会いしてゆっくりお話し申し上げ、この子らのために力になっていただきたいと、常日頃思いつつ果たすことのできない方々に、大変失礼だと存じながら、謹んでお贈り」したところ、意外の反響と、数々の激励をいただき、すっかり感激したのでした。

部数ですか。今申しました通り、しろうとわざの謄写刷り、とぼしいポケットマネーの中からながら、せめて百部ぐらいはと思ったのですが、実際のところ、人に献げ得るものは、ほんの四十部あまりということで、あとで、ぜひ、と言って来られて、おわびするのに思わぬ冷汗を流したような次第でした。

x

冷汗といえは、地方で知名の若い文化人Y氏が

……出張の金名線車中、二時間、白い風物語を読ませて頂きました。忘れられた子らに対する認識のない私が、この一巻を読ませて頂いたことで如何に大きな感動を得たことか、知識を得たことか。

困難な中で確りと自らを支えて教育しておられる偉大な人間像に申しあげる言葉もないというところです。……

途中で涙で曇つて、字が見えなくなりました。電車に乗り合わせた人達は不思議なことだつたと思います。……

といい、「これ程大きな感動を受けた本には最近接しませんでした。」という、全く身にあまる言葉をいただいたり、N市の図書館の司書のK氏が、その館報で激励を寄せられたり、お忙しいK女史がわざわざ小立野の奥の私の学校まで来られて励ましの言葉を下さるなどといった、自分の小著に対するお義理世辞をまに受けるなど笑われそうですが、本当のところ私にとっては非常な感激に打たれたものでした。

それから、またたく間に二年がすぎ去りました。

私は、やっぱり「ろう学校」で、「ろう児」と共に暮らしています。

ろう児が泣けば、いまだにおろおろし、ろう児が笑えば、いっしょになって大声立てて喜んでゐる私です。ろう児も「人の子」です。泣きもし笑ひもします。けんかもし、ふざけもします。

ただ残念なことには、耳が聞えません。だから、いろいろと普通の子らと違ってゐます。

けれども、やっぱり人の子です。ぐんぐん伸びています。さらに、ぐんぐん伸びようとしています。

健全なといわねばならぬひとびとの世の、いきどおろしいまでの醜さに、ともすれば生きる希望さえ見失いがちのきょうこのごろを、私は、不幸だといわれるろう児の、汚濁に染まぬひとみの清らかさに、はっと教えられ、人間としての喜びをとりもどすことの、何としばしばあることでしょう。

既に五年経て、なおろう教育者としての未熟を告白しなければならぬ私ながら子らは五年前の子ならず、あるいは勉強にあるいは運動に、普通児と見劣りせぬまでに成長してゐる姿を見て、時には快哉を叫びたくなる日もあります。

また、社会の方々のろう児やろう教育に対する認識も、今では何層倍も高まりつつあり、私どもはどれほど力強く思っているかわかりません。

チエコは「ふぶき」のことを「白い風」といいました。

痛いまでに冷たい「ふぶき」ということばに対して、さはりながらも、何か行手にほのぼのとした明かるさを感じ得ることばではないでしょうか。

この子らを抱いて、私の頭の中にも、心の中にも、絶えず「白い風」が吹きまわっている、と申さなければなりません。ろう児達にとって、やがて出て行く世の中にも、「白い風」は吹きすさんでゐることでしょう。

しかし、その先には明かるい希望の光を信じたいと思つて、チエコのことば「白い風」を、この小著の題名としたのでした。ぜひにといわれる編集者の意図はどこにあるかは知りませんが、世の人々の、さらに一層の理解と協力を念じて、旧著

『白い風物語』について、臆面もなく、筆を取った次第です。

以下、私のスケッチから――

× ×  
警笛、あまり広くない郊外の道路であった。子供たちはてんでに思い思いの喜びの表わしようで、後になり、駆け出した  
り立ち止まったり、わめいたりしながら、喜々として澄み切った秋空の下を進んで行った。突然、背後ではげしい自動車の  
警笛を聞いた。せっかく楽しんでゐるのに喜びを破られた、と思ったのは私ひとりで、子供達は依然きゅきゅさえずりながら  
道一ぱいにはねまわって進んで行く。

「おーい、危いよオ。」

と叫んでから、はっとなった。

馴れていらしゃる他の先生は、何はさておき、と自動車に飛びつくように馳け寄り、

「ごめん、聞こえん子らや」とどなって、スピードを落してもらい、今度は子供達に、飛びついて、ひとりびとり道路の端  
へ押しやられた。

× ×  
ろう学校の生徒だとわかって、「やあ」と会釈して自動車が去ったあと、結局おろおろするばかりで何もできなかった私  
は、「なるほどねえ」と感心して、ひとりうなづくばかりであった。(24・14・8 はじめての遠足で)

× ×  
Y 子の日記の一こま――

姉と弟、十二月二十八日おひるから弟とふたりで、お勉強をしました。勉強がすむと、今度は考え物をして遊びました。  
私は弟のお話が、まだ良く見ることができないのですが、小さい黒板に弟が絵を書いてくれたので、良くわかりました。  
× ×  
体がやかましい。私の教室は、講堂に近い。講堂兼雨天体操場である。

体操などがあると、ぎやアぎやア実にやかましい。子らにはもとより聞こえない。静かに学習している。駈け足をやり出した。

と、学習をしている子らが、さわさわ騒ぎ出して、叫んだ――

「やかましい、やかましいッ」

けげんな顔をした私に、

「どんどんすると、床の板からひびいて来ます。」

そして、足の裏から体に、震動がやかましく鳴りとどろくのだとのこと。

×

小学部二年。ゴハンゴハンと鐘が鳴る、

擬声語の指導をしていたO先生、

「それでは、鐘は何といって鳴りますか。」

ハイハイハイと勢よく手を挙げたハルヒト、指されて、

「ハイ、ゴハンゴハンゴハンといいます。」

ハルヒトは寄宿舎生である。

寄宿舎では、食事の時間になると、炊事のオッサンがカンカン鐘を鳴らして合図することになっている。

子らの食欲は旺盛である。待ち切れぬ子らが、廊下や窓から鐘の鳴らされるのをうかがっている。腹はぎゅうぎゅういっている。

炊事のおじさんやおばさんが食器をテーブルに並べている。もうすぐだ。

やがて鐘が鳴る。高らかに、ゴハンゴハンゴハンと。

×

頭びんぼう　ろう児達は、限られた語彙の中で表現しようとする時、奇想天外の「造語」をすることがある。中には、なかなか味のあることがある。

『アタマールビンボウ』は、その一つである。

バカとかアホウとかいうことばに感ぜられる「侮蔑」もなく、シソウ・ヒンコンなどという「固さ」もなく、そうした感じをひっくり返るという「アタマールビンボウ」には、ユーモアとペーソスが感ぜられるではないか。

たとえ『頭ビンボウ』はまぬがれないにしても、『心ビンボウ』にはなってくれるなと祈りつづける私ではある。

『北陸文学』の依頼によって、私の「白い風物語」について書いたもので、その第八号（昭30・9・10発行）に「白い風物語・その後」として載せられたものである。それが、思いもかけず『新潮』の編集者の目にとまり、抜すいして「ろう児についてのノート」という見出しで、その十一月号に転載された。

「白い風物語」は文中にも述べた通りごく僅かの範囲にしか贈ることができなかったが、両誌を通じてさらにいろいろの批評を得ることができた。

ただ一つを除いては、いずれも好意にあふれたことばで、はじめてろう児に親しさを感じたとか、今までただ不具の子らとして暗い印象を持っていたが、実にほほえましく明かるさをもってながめることができたとか述べて、激励が添えられていた。

そのただ一つの意見とは、ああいうものではろう児の正しい理解に役立たぬというおしかりで、ろう教育の権威者のひとりと自他とも許しておられる某氏のご批判で、間接的に承って恐縮した次第である。

もとより私はこの道に入って浅い。その真髄はまだまだわからない。けれども、学理的、専門的な研究発表とはべつに「みなさん、ろう児はこんな具合です。でもやっぱり同じ人の子ですひとつとつと親しきをもって接してやってください」と世人に叫ぶこともまた、ろう教育者の勤めだと信じている。

しかし、雑文は雑文にすぎない。これをこの研究紀要に掲載しようと申出られたときには困ってしまった。輝かしい研究の発表の場である。この貴重な紙面を汚すことをおそれたのである。

願わくは、研究のあいまの肩のこらぬ息抜きとして、炉辺のお話合いのよすがにでもしていただけたらと思う。

(30・10・18)